



1 行きかう、にぎわう、交流拠点都市

藩領のどこへ向かうにも、^{とおりちょう}通町筋と柳川往還の交差点「札の辻」が起点となります。その他の主要な道路も、城下から放射状に延びていきました。街道は、参勤交代の大名、公務を抱えた幕府や諸藩の役人、商人など、様々な立場の人々がそれぞれの目的で通行しました。

また筑後川では、水運を利用して、年貢米や菜種・藍などの産物が領内から城下に集められ、瀬下から若津（大川市）を經由して他藩や大坂に向けて輸送されました。

久留米城下町は、藩の産業や交通の発達に伴って、人々の交流と物流の拠点都市として成長を続けました。

有馬の 城づくり、 町づくり

21万石のトップは、都市の発展をどう守っていった！？

久留米城下のまちづくり

久留米藩主4代・約80年にわたる大事業によって、基礎が完成した久留米城下町。成長とともに浮かび上がる新たな課題。都市の発展を支えたのは、暮らしを守る知恵と工夫でした。

2 城下町の守りと護り

商業や文化の中心として栄えた久留米城下町は、久留米藩21万石の軍事拠点でもありました。

城下町の各口に配置した寺院や、寺町を構成する寺院群は、城下町の防衛線としての役割を担っていました。特に、寺町の西方に隣接する鉄砲小路には、戦陣では最前線で戦う鉄砲部隊の足軽たちが居住していました。町や小路の配置のほか、道筋を鉤の手にするなど、城下町の随所に外部の侵略に備える工夫が施されました。

城下町には各所に寺社があり、人々の信仰の拠り所となっていました。寺院は、城下町に住む人々の没後を弔い、その墓地としての役割も持っていました。

神社では、外郭の祇園社が疫病払いの祇園会を行い、老若男女による神幸行列は藩主家族も見物しました。久留米城地の地主神・山王宮（日吉神社）は、2代忠頼の代に十間屋敷に移され、市中の鎮護や諸祈願を引き受けました。また、火災の多い城下町では、京隈小路や櫛原小路、鉄砲小路に秋葉神社が建てられ、火除けの神を祀りました。城下町の護りを神仏に託す、人々の祈りがうかがえます。

3 防災のまちづくり

災害対策は、江戸時代を通して久留米城下町の大きな課題の1つでした。

記録に残る災害80件のうち、火災が55%、洪水が27%だったといえます。

当時の家屋は木造で防火に限界があり、藩は延焼を避けるため、密集する建物を移転させて、火除け地（防火用の空き地）を設けました。城の各出入口に水桶を備える防火対策も行っています。

水害対策として、4代頼元の代に柳原の低地にある侍屋敷を京隈小路に移転させます。また藩は、筑後川の水防工事とともに、城の周囲の貯水機能を高めるため、堀の浚渫や土居のかさ上げ工事も繰り返し行いました。

久留米城下町は、そこに暮らす人々の安全を守るため、藩の防災の町づくりによって少しずつ形を変えていきました。

